

17 アジア諸国の巡礼の文化と島根半島の巡礼路

【全6回】／開催方法：現地のみ

せ こ やす お
瀬 古 康 雄

シタール奏者
しまねガムラン主宰



受講料 一般料金：¥10,600 早割価格：¥9,600(納入期限：5月6日)

【日程】【全6回】1回/月 第2土曜日 ※6月のみ第3土曜日
(5/10、6/21、7/12、9/13、10/11、11/8)

【時間】14:10～15:40

■受講に必要なもの

[テキスト] レジューメ配布

インドのベナレスにあるガンジス河畔のガートには様々な巡礼が訪れる。世を捨てて遊行乞食の旅をするサドゥー（行者）は、サドゥーになる儀礼を行った始まりの地ベナレスとガンジスの源であるガンゴトリを最重要の聖地としつつ全国を巡礼する。サドゥーだけでなく、ヒンドゥー教の男性は一生に一度はインドヒマラヤ山麓ガンゴトリ（ガンジスの源）に参詣すべきだと言われる。

ガンジス川はガンガー・マタジ（母なるガンジスの女神）と呼ばれ、インドの大地を滔々と流れる大河であるが、支流の一つであるネパールヒマラヤの尾根の狭間の渓谷になると、世界最深と言われるカリガンダキ（荒々しいカーリーの魔女）となり、その最奥にある「ムクティナート（解脱の地）」にはヒンドゥー教の寺院やラマ教の寺院があり、様々な人々が山岳信仰のような形で巡礼している。

境内の禊の池と百八つの清めの「お滝」を回れば、すべての罪と穢れが除かれ、死後の魂は天界へと登っていくと言われる。実際の山旅を経験してみると、それは正に四苦八苦の毎日であり、最後には晩秋の富士山頂で禊をするような苦行であったが、このような旅は一日ごとに苦楽を越えていく旅でもあり、その経験が内面化されるので「浄化の旅」というべきものであった。

インド亜大陸の中央部デカン高原では、野宿し自炊しながらベナレスへと旅する郷村の巡礼たちに出会った。みんな食料や鍋竈一式を背負うか頭に載せて延々と歩いていくので暑くて大変だが、郷里を離れて皆で遊行するのが最高の楽しみでもあるという風情である。ベナレスに着くとこのような人たちはガートの入り口で物乞いしている乞食の人たちに食べ物と小銭をお恵みしながら旅を締めくくるので、ここでも強欲から離れる「浄化の旅」の姿がある。

この講座では私自身がインド各地で撮影したビデオや写真等を使って巡礼の姿を紹介したい。

インドの巡礼の文化は仏教とともに日本に伝来し、島根半島にも様々な形で遍路道や修験道の名残が見られ、「島根半島四十二浦巡り再発見研究会」による詳しい調査報告がある。宍道湖や中海から望む島根半島の山腹にも様々な巡礼路の名残があり、私は偶然にも納蔵の北山山中で、遠くに大山が見えるからであろうが、「大山講」の石碑を見つけたこともある。島根半島の東には「大山講」、西には「一畑講」という構図である。

日本のお遍路はお寺参りを兼ねた物見遊山の旅であり、インドのような苦行の旅ではないが、日本の風土に見合って、山川草木と一体になれるという、ささやかな「浄化の旅」である。島根町の大芦浦の山手中腹には四国八十八か所巡りの簡易な巡礼路があり、大芦の隣の小具には昔の修験道の石碑があり弁天堂にもお参りできるので、この講座でも島根町の浦々を少し散策してみたいと思います。